

# 近世日本豊後のキリシタン禁制と民衆統制

佐 藤 晃 洋

## 【要 旨】

本稿では、現在まで調査されたバチカン図書館所蔵マリオ・マレガ神父収集文書を中心として、臼杵藩を例に近世豊後におけるキリシタン禁制政策の展開について検討した。

臼杵藩のキリシタン禁制政策は、当初、キリシタン一人一人を改宗させることをめざしていた。表面上キリシタンがいない状況になった寛永12年（1635）、改宗した者を名子・下人なども含む「いえ」単位で把握し監視する体制を作っている。正保3年（1646）、改宗した者が改宗する前に生まれた子ども等も監視の対象者に加え、各村の地縁的な繋がりを断ちきって改宗した者を散らばらせ五人組を編成することにより、監視体制の強化を図った。

延宝5年（1677）以降は隔年で長崎奉行所から踏絵を借用し絵踏を実施し、元禄元年（1688）からは絵踏を毎年実施としている。貞享4年（1687）には「類族」も監視対象とされ、臼杵藩のキリシタン禁制政策は確立した。この政策は明治4年（1871）まで継続しているが、19世紀になると、宗門改が民衆統制のための年中行事となり、「家内帳」等による民衆把握に重点が置かれるようになっていった。

## 【目 次】

はじめに

### 1. 臼杵藩におけるキリシタン禁制政策の開始

- (1) 個人から「いえ」へ
- (2) 監視対象の拡大
- (3) 地縁の寸断
- (4) 「宗門改帳」の作成

### 2. 臼杵藩におけるキリシタン禁制政策の確立とその後

- (1) 豊後崩れと宗門改制度の完成
- (2) 絵踏の年中行事化
- (3) 宗門改に対する意識の変化

むすびにかえて

## はじめに

江戸幕府は、慶長17年(1612)にキリシタン禁制を打ち出し、翌年には全国的禁教令を布告した。この直後の豊後(大分県)の状況を報告した『1614年度日本年報』[写真1]<sup>1)</sup>には、豊後にかつて「高田」「野津」「志賀」という3つのイエズス会の拠点があったと記されている[図1]。「高田」は現在の大分市にあり、後述する「豊後崩れ」に際して多くの殉教者が出た地域である。「野津」は現在の臼杵市にあり、パチカン図書館所蔵マリオ・マレガ神父収集文書(以下、マレガ文書と表記)に登場することが多い地域である。「志賀」は現在の竹田市にあり、他の宣教師報告書で「朽網」と表記された地域の近くである。これらの地域をはじめ大分県内には、16世紀末から17世紀初頭にかけてのキリスト教に関連する遺跡や資料等が残されている。例えば、この時期に形成された「下藤地区キリシタン墓地」(臼杵市)[写真2]、正面(東面)の中央に十字架が刻まれている「搔懷キリシタン墓」(臼杵市)[写真3]、キリシタン墓に関連する「INRI」という文字が刻まれたT字型の墓碑である「原のキリシタン墓碑」(竹田市)[写真4]などがある。

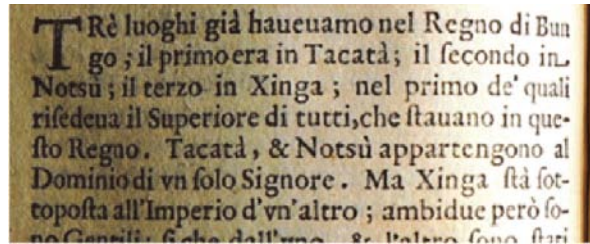


写真1 『1614年度日本年報』



図1 豊後でイエズス会の拠点であった地域



写真2 下藤地区キリシタン墓地



写真3 搔懷キリシタン墓



写真4 原のキリシタン墓碑

豊後とキリスト教との関係は、天文20年(1551)に大友宗麟(1530～1587)がフランシスコ・ザビエル(1506～1552)を豊後府内(大分市)に招いたことに始まる。当時、宗麟は北部九州に勢力を広げており、キリスト教の布教を許可したことにより多くの宣教師らが豊後を訪れ、キリスト教が広まっていった。宗麟自身も、天正6年(1578)に洗礼を受け、洗礼名を「フランシスコ」としている。この洗礼名をデザイン化した「FRCO」や「IHS FRCO」[写真5]の印章を使用した時期もある。



写真5  
印章「IHS FRCO」

1) 大分県立図書館蔵。

豊後におけるキリスト教の広がりの中で、聖地エルサレムを日本人として初めて訪れ、ローマで司祭に叙階されたペトロ岐部カスイ（1587～1639）が出ている<sup>2)</sup>。日本に関する情報も、宣教師らの報告や天正10年（1582）に派遣された天正遣欧使節等によってヨーロッパに伝えられている。ポルトガルのイエズス会士テイセラの描いた日本図〔写真6〕では、北部九州に大きく「BVNGO（豊後）」と記されている<sup>3)</sup>。



写真6 「テイセラ日本図」

ところが、16世紀後期から布教することさらには信仰することも制限を受けるようになり、キリスト教が禁止される時代がきた。マレガ文書は、豊後においてキリスト教が禁止された時代に関する史料が中心となっている。17世紀から19世紀中頃までの豊後は小藩分立の状態となっており、江戸幕府の政策に沿って、各藩でキリシタン禁制政策が実施されていった。『1614年度日本年報』に記されていた「高田」と「野津」は臼杵藩領、「志賀（朽網）」は岡藩領であった。

#### 臼杵藩におけるキリシタン禁制政策確立までの動き

西暦	年号	キリシタン禁制の流れ（○豊後）	大友宗麟	ペトロ岐部
1530	享禄3		誕生	
1549	天文18	フランシス・ザビエル来日		
1551	天文20	○大友義鎮（宗麟）がザビエルを府内に招く		
1587	天正15	伴天連追放令	逝去	誕生
1612	慶長17	幕府、キリシタン禁制を打ち出す ○臼杵藩、野津・高田の宣教師らを追放		
1613	慶長18	幕府、全国禁教令を布告		
1615	元和元			出国
1620	元和6			ローマ到着
1630	寛永7			帰国
1635	寛永12	○臼杵藩、「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」及び「きりしたん宗門御改之御帳」を作成させる		
1637	寛永14	島原・天草一揆（～1638・寛永15）		
1639	寛永16			殉教
1646	正保3	○臼杵藩、「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」を作成させる ○臼杵藩、「貴理志旦御改五人組之御帳」等を作成させる		
1660	万治3	○豊後崩れ（～1682・天和2）		
1677	延宝5	○臼杵藩、長崎奉行所から踏絵を借用して隔年で絵踏を実施		
1687	貞享4	幕府、本人・本人同然・類族を規定 ○臼杵藩、「切死丹本人并類族御帳」等を作成させる		
1688	元禄元	○臼杵藩、絵踏を毎年実施に		

2) ペトロ岐部カスイは、幾多の困難を乗り越えて禁教下の日本に帰り、長崎や東北で布教していたが、捕らえられ江戸で殉教した。2008年に「ペトロ岐部と187殉教者」として日本で187人の殉教者とともにカトリック教会の福者に列せられた。

3) 大分県立先哲史料館蔵。

臼杵藩におけるキリシタン禁制政策については、これまで多くの蓄積がある<sup>4)</sup>。これらの研究の基本史料は、マリオ・マレガ神父（1902～1978）の編纂した『豊後切支丹史料（正・続）』<sup>5)</sup>であった。今後も『豊後切支丹史料（正・続）』が日本におけるキリシタン研究の基本史料であることは変わらないが、『豊後切支丹史料（正・続）』に収録されていない未公開の多数の史料を含むマレガ文書の調査・研究が進めば、日本における禁制下のキリシタンの状況がさらに明らかになってくると期待される。

本稿においては、現在まで調査されたマレガ文書を中心として、臼杵藩を例に近世豊後におけるキリシタン禁制政策の展開について検討を進めていくこととする。

## 1. 臼杵藩におけるキリシタン禁制政策の開始

### （1）個人から「いえ」へ

江戸幕府による慶長18年（1613）の全国的禁教令に沿って、臼杵藩は慶長19年（1614）からキリシタン禁制政策に本格的に取り組みは始めている。

臼杵藩のキリシタン禁制政策は、当初、キリシタン一人一人が改宗することをめざして実施された。例えば、キリシタンであった宮河内村（大分市）の助左衛門は、慶長19年（1614）に改宗し戸次市村（大分市）妙正寺の旦那となっている。キリシタン禁制政策において、人々は必ず寺院に所属することになり、所属した寺院を檀那寺、寺院に所属した者を旦那や檀家などと呼んだ。そして、助左衛門は、寛永11年（1634）の宗門改に際して、奉行の前でイエス・キリストなどを描いたものを踏んでキリシタンでないことを証明する絵踏を行っている<sup>6)</sup>。

このような個人を対象とした改宗政策の結果について、改宗した者への監視強化を目的として作成された正保3年（1646）の「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」からみてみよう。マレガ文書に含まれる「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」の内、キリシタンが改宗した年が記されている48通をみると、慶長19年（1614）10人、元和8年（1622）50人、寛永8年（1631）4人、寛永10年（1633）16人、寛永11年（1634）3人となっている。臼杵藩内の全てではないが、元和8年（1622）を中心に多くのキリシタンが改宗した状況をうかがうことができる。また、寛永12年（1635）以降に改宗した者は記されていないことから、臼杵藩においては寛永12年（1635）には表面上キリシタンがいない状況となっていたと考えられる。

寛永12年（1635）、臼杵藩では家族をはじめ名子・下人等を含む家内（以下、「いえ」と表記）毎に「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」を作成・提出させている。「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」は、「いえ」単位でキリシタンでないことを記し、各人の檀那寺がそれぞれに旦那であることを署名・捺印して証明したものである。例えば、芦刈村（豊後大野市）

4) 本稿は、村井早苗『幕藩制成立とキリシタン禁制』（文献出版、1987年）、同『キリシタン禁制と民衆の宗教』（山川出版社、2002年）、豊田寛三「キリスト教の禁圧」（『大分市史 中』大分市、1987年）等の研究に負うところが大きい。

5) 『豊後切支丹史料』（サレジオ会、1942年）、『続豊後切支丹史料』（ドン・ボスコ社、1946年）。

6) 「ころひきりしたん宗門重而御改ニ付御請状之事」マレガ文書A2.3.1.1、マレガ氏はこの絵踏を「臼杵藩に於ける最も古い記録」としている（『豊後切支丹史料』）。



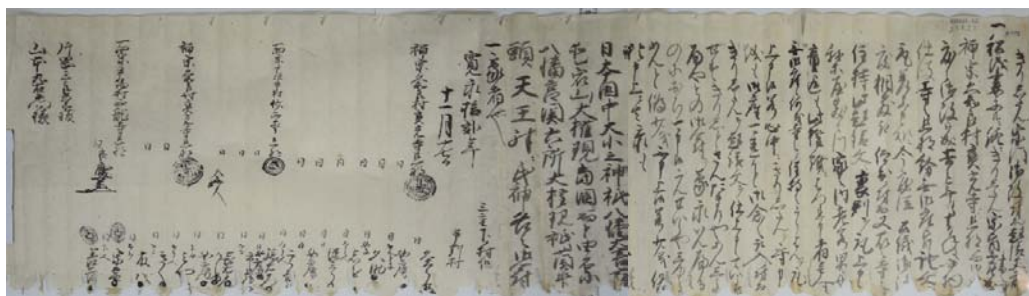


写真7 「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」

久太郎は、「いえ」の18名がキリシタンではないと記した「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」[写真7]<sup>7)</sup>を提出している。各自の名前の下には、久太郎が花押、他が略印として「●」「○」印を付し、全員血判をしている。この起請文には、別筆で3つの寺の名称をみることができる。久知良村（豊後大野市）宝光寺旦那が10人、戸次市村（大分市）妙正寺旦那6人、市場村（豊後大野市）正龍寺旦那2人となっている。この起請文の前書には、昨年・一昨年もキリシタンでないことを記した証文を提出し、檀那寺の証明も付したことが記されている。臼杵藩においては寛永10年（1633）から、宗門改に際して証文を作成し、檀那寺の証明も付すようになったということである。

村組を統括する大庄屋<sup>8)</sup>が、この「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」を村組毎に集め、村組の人数や起請文数をまとめて「きりしたん宗門御改之御帳」を作成して、藩宗門方に提出している。藩宗門方では、「いえ」毎の「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」と村組毎の「きりしたん宗門御改之御帳」を臼杵藩のキリシタン禁制政策の根本資料として保存し活用したと考えられる。

このように、臼杵藩では、当初は、宮河内村（大分市）の助左衛門が寛永11年（1634）に奉行の前で絵踏を行いキリシタンでないことを証明させられたように、キリシタンであった者一人一人を改宗させ、キリシタンがいない状況を作り上げようとした。そして、表面上キリシタンがいない状況となった寛永12年（1635）には、「いえ」毎の「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」等の提出にみられるように、寺院も活用しながら、改宗した者を「いえ」単位で把握し、再びキリシタンとなることがないように監視する体制を作ろうとしたといえる。

## （2）監視対象の拡大

キリシタンを中心とした人々が領主苛政に対して起こした島原・天草一揆（1637～38）後、幕府によるキリシタン禁制政策はさらに強化され、臼杵藩においても様々な側面からキリシタン禁制政策が強化された。

7) マレガ文書A6.2.1.7.2.2。

8) 臼杵藩においては、各村組には総括責任者として原則一人の「庄屋」、各村には「弁指」が置かれた。庄屋は慣用的に「大庄屋」と呼ばれることもあった。天保5年（1834）以後は、庄屋を「大庄屋」、弁指を「(小) 庄屋」と称するようになった。本稿では、村組を統括する者の呼称として「大庄屋」を使用した。

まず、正保3年（1646）、キリシタン禁制政策の新たな側面として、監視対象を改宗した者から拡大したことがあげられる。

慶長19年（1614）にキリシタン禁制政策がとられる前に改宗した者は、それまでの宗門改では対象となっていなかったが、正保3年（1646）には絵踏を行っている。「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」99通の中には、慶長16年（1611）に改宗した1人と慶長18年（1613）に改宗した1人が記されている。この2人は、正保3年（1646）に「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」を作成する中で、奉行の前で絵踏を行いキリシタンでないことを証明している。これ以降、改宗した者として監視されることになった。

また、改宗した者が改宗する前に生まれた子どもは本人が覚えていなくても幼少時に洗礼（幼児洗礼）を受けている可能性があるとして、監視の対象としたのである。正保3年（1646）、「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」を作成する際に、幼児洗礼を受けた可能性のある者は、絵踏によりキリシタンでないことを証明している。「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」99通の中には、9人が記されている。

このように、改宗した者として把握する範囲を広げ、監視を強化している。

### （3）地縁の寸断

臼杵藩におけるキリシタン禁制政策を強化するための新たな側面として、キリシタン禁制のための連帯責任の組織として「五人組」を編成し、改宗した者の監視を強化したこともあげられる。

まず、臼杵藩ではこの頃から改宗した者を「転びキリシタン」と呼ぶようになり、改宗した者を対象として「ころひきりしたん（転びキリシタン）宗門重而御改ニ付御請状之事」を作成・提出させている。例えば、宮河内村（大分市）の助左衛門は、正保3年（1646）8月5日付けで、「いえ」全員の名前を書き上げ全員キリシタンではないことを記し、檀那寺が署名・捺印し内容を証明したものを、藩宗門方に提出している〔写真8〕<sup>9)</sup>。助左衛門の「いえ」では、1人だけ

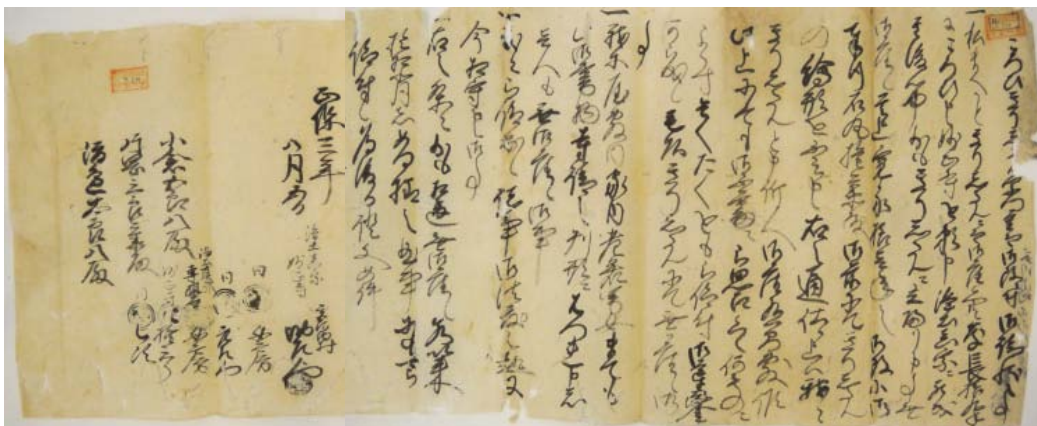


写真8 「ころひきりしたん宗門重而御改ニ付御請状之事」

9) マレガ文書A2.3.1.1。



写真9 「きりしたん宗門重而御改二付五人組御書物之事」

檀那寺が異なっているが、それぞれの檀那寺に持参し署名・捺印してもらっている。

臼杵藩が改宗した者に「ころひきりしたん宗門重而御改二付御請状之事」を作成・提出させたねらいは、キリシタンではないことを確認するとともに、「いえ」の人名等を書き出させることにあった。藩宗門方は「宮川内村ころひ（転び）書物 助左衛門」と端裏書きして保管し、改宗した者の基礎台帳として活用したと考えられる。

このような改宗した者を対象とした禁制政策と並行して、臼杵藩は、編成した五人組毎に「きりしたん宗門重而御改二付五人組御書物之事」を作成・提出させている。正保3年（1646）8月16日付けの池原村（臼杵市）4軒と日当村（臼杵市）1軒で編成された五人組による「きりしたん宗門重而御改二付五人組御書物之事」[写真9]<sup>10)</sup>をみると、キリシタン禁制に関して守るべき5項目が記され、5軒の当主が署名・捺印している。そして当主署名の上方に、「いえ」の人々が旦那であるという証明を檀那寺が署名・捺印して貼り付けている。「いえ」に檀那寺が異なる者がいる場合は、それぞれの檀那寺から証明をもらい、重ねて貼り付けている。例えば、1軒目の池原村源右衛門の「いえ」の場合、源右衛門と娘の二人が野津（臼杵市）普現寺の旦那、女房が野津（臼杵市）尊形寺の旦那であると、それぞれの寺が証明している。この「きりしたん宗門重而御改二付五人組御書物之事」は、5軒の「いえ」合計21人の証明となっている。

マレガ文書には、各「いえ」の状況が明らかとなる正保3年（1646）の「きりしたん宗門重而御改二付五人組御書物之事」が99通ある。これらをみると、五人組99組の内、改宗した者がいる「いえ」が1軒含まれているのが42組、2軒含まれているのが5組、3軒含まれているのが1組となっている。「いえ」数では498軒の内、改宗した者がいる「いえ」は55軒、人数では約1,800人の内、改宗した者は85人である。改宗した者がいる地域には偏りがあり、当然ではあるがキリシタンの多かった野津（臼杵市）に改宗した者が多い<sup>11)</sup>。

10) マレガ文書A5.4.2.5.1.3。

11) 野津地域の村の中で1か村全体の状況がわかる寛文6年（1666）の「川登組清水原村人数之御帳」（マレガ文書A1.3.1.3.1）をみると、「いえ」数30軒、188人（男103人、女85人）の内、改宗した者は19人（男11人、女8人）と記されている。清水原村住民の1割が、かつてキリシタンであったことになる。



正保3年（1646）の「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」99通から改宗した者がいる「いえ」が五人組の中に1～3軒ずつ散らばっている状況をみると、改宗した者を固まらせないということを五人組編成に際して留意したことがうかがえる。また、常に監視するという意味では同一村内の隣近所で五人組を編成した方が効果的であると考えられるが、1か村内で編成されていた五人組はわずかに3組であった。池原村源右衛門らの五人組と同様に、2か村で編成されていた五人組が一番多く、73組であった。五人組の編成村が3か村は13組、4か村は7組、5か村は3組であった。臼杵藩の編成した五人組は、改宗した者を散らばらせるというだけではなく、各村の地縁的な繋がりを断ちきって五人組を編成することにより、知っている者同士で隠したりかばったりすることが起きないようにしたと考えられる<sup>12)</sup>。

このように、臼杵藩は、「ころひきりしたん宗門重而御改ニ付御請状之事」の作成を通して改宗した者を「いえ」も含めて把握し、五人組編成を通して改宗した者をはじめ領民が繋がりを持てないように地縁を断ち切った上で相互監視の体制を整えていったといえる。

#### （4）「宗門改帳」の作成

臼杵藩では、正保3年（1646）9月以降、「ころひきりしたん宗門重而御改ニ付御請状之事」の提出が完了した報告及びキリシタン禁制に関する5項目等を守ることを記し、五人組毎に「いえ」の筆頭者に署名・捺印させた「貴理志旦御改五人組之御帳」を村組毎に作成させている。例えば、「森村組貴理志旦御改五人組之御帳」[写真10]<sup>13)</sup>を見ると、森村・葛木村・猪野村（いずれも大分市）の五人組23組が取りまとめられている。「いえ」の筆頭



写真10 「森村組貴理志旦御改五人組之御帳」

者名の上方に檀那寺名、村名が記され、筆頭者の署名・捺印があり、各頁に五人組2組分が記されている。臼杵藩は「貴理志旦御改五人組之御帳」を作成することにより、個人ではなくどの五人組のどの「いえ」に改宗した者がいるかを把握したと考えられる。

この後、臼杵藩においては、「いえ」全員の名前や檀那寺の証明が記された「ころひきりしたん宗門重而御改ニ付御請状之事」と、村組毎に「いえ」の筆頭者を書き連ねた「貴理志旦御改五人組之御帳」との内容をまとめた「宗門改帳」を、宗門改の際に作成するようになっていくのである。改宗した者に焦点をあててではなく、領民全員の名前や檀那寺を記した「宗門改帳」により領民一人一人を把握できるようにしたと考えられる。そして、臼杵藩は、延宝元年（1673）に、「宗門改帳」を幕府に提出している<sup>14)</sup>。

12) 延宝9年（1681）の「宗門御改御書物御帳 藤川内組」（マレガ文書A1.3.11.1）では、五人組が同一村内で構成されている。35年の間に、五人組の当初の目的が達成され、相互扶助や犯罪防止等も目的としつつ再編されたのであろう。

13) マレガ文書A1.3.10.1。

14) 「稲葉家譜」（臼杵市蔵）。



## 2. 臼杵藩におけるキリシタン禁制政策の確立とその後

### （1）豊後崩れと宗門改制度の完成

万治3年（1660）5月、熊本藩領高田手永（大分市）において潜伏キリシタンが捕縛された。これをきっかけとして、臼杵・岡・府内などの藩領や幕府領において潜伏キリシタンが多数捕縛されている。潜伏キリシタンの捕縛は天和2年（1682）頃まで続き、これらを総称して豊後崩れと呼んでいる。

このような中で、臼杵藩では、寛文5年（1665）に宗門奉行を設置し3名を任命し、延宝5年（1677）以降、長崎奉行所から踏絵1枚を借用して絵踏を実施している<sup>15)</sup>。長崎へは宗門奉行が借用に出かけている。当初は町人・百姓らを対象として、1年目に絵踏による宗門改、2年目に「宗門改帳」の作成という隔年での実施であった。延宝7年（1679）からは藩士の「いえ」も対象に加え、貞享2年（1685）からは宗門改に領内人口の把握という目的も加味している。そして、元禄元年（1688）からは、それまで絵踏をしていなかった僧侶も加え全領民を対象とするとともに、絵踏の実施を毎年としている。絵踏の対象を増加させたため、長崎奉行所から借用する踏絵も2枚となっている。

また、貞享4年（1687）7月16日、臼杵藩では幕府が発布した「キリシタン禁制覚」について、藩重役を城に集めて申し渡している<sup>16)</sup>。「キリシタン禁制覚」では、改宗した者を「転びキリシタン本人」、改宗する前に生まれた子どもを「本人同然」と呼び監視対象としていたが、今後これらの人々に加えて、改宗した後に生まれた子どもをはじめとする親族を「類族」として監視対象とすることが定めら

れている。臼杵藩では、幕府の定に沿って、「転びキリシタン本人」や「本人同然」毎に「類族」を書き上げた「切死丹本人并類族御帳」を作成し、類族管理の基礎台帳としている。例えば、小池原村（大分市）の吉之丞の場合〔写真11〕<sup>17)</sup>をみると、吉之丞は「本」と朱書され、「類族」として親類30人が書き上げられている。

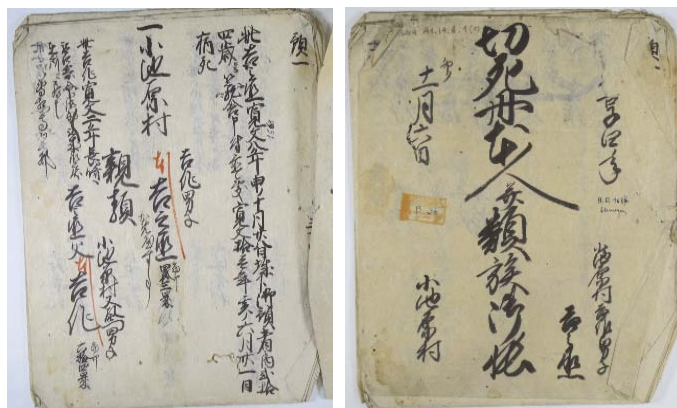


写真11 「切死丹本人并類族御帳」

「類族」の監視は、「転びキリシタン本人」や「本人同然」が死亡してしまっても続けられている。出生、死亡、婚姻、養子縁組、転居、出家等の変動は届け出ることとされた。各村や村組では、「切

15) 「稲葉家譜」（臼杵市蔵）。

16) 「貞享四年 御会所日記」（臼杵市蔵）。

17) マレガ文書A1.14.6.2.1。

死丹本人并類族御帳」等を基にして「類族名寄帳」を作成し、常に変動を記録していた。例えば、丹生原村組（大分市）の宝暦6年（1756）の「類族名寄帳」<sup>18)</sup>では、丹生原村組の原村（大分市）に197人の「類族」が記載されている。「類族」については、特に、「行方知れず」が大問題として重要視されていた。

このように、臼杵藩においては、豊後崩れの中で、宗門改の実施方法や「類族」の監視等、キリシタン禁制政策の形が整えられた。そして、その過程で、改宗した者だけを対象としたものから、「類族」を加え、さらには広く全領民を対象とした民衆統制政策へと変質していくのである。

## （2）絵踏の年中行事化

元禄元年（1688）から絵踏を僧侶も含めた全領民対象に毎年行うようになっていくと、臼杵藩における宗門改は毎年ほぼ同様の流れで実施されるようになっていく。

時代は下がるが、文化14年（1817）に実施された宗門改についてみてみよう<sup>19)</sup>。臼杵藩では、前年の12月に宗門下役の麻生金兵衛が長崎奉行所から踏絵2枚を借用するために出張することが決定していた。1月になり、金兵衛は2日に長崎奉行への書状を預かり、3日に随行5人・馬1疋を従えて長崎に向け出発した。11日に長崎に到着した金兵衛は長崎奉行所において踏絵2枚を受け取り、21日に臼杵に帰着している。藩では、23日から城下町に住む町人たち、28日から家臣団、2月3日から領内を2分割して廻村し、絵踏による宗門改を実施している。廻村の終了は21日であった。踏絵2枚の返却は、2月1日に決定していた宗門下役の和田三郎左衛門が、23日に随行5人・馬1疋を従えて長崎に出発している。三郎左衛門は3月2日に踏絵2枚を長崎奉行所に無事返却し、12日に臼杵に帰着している。このように、臼杵藩は、絵踏による宗門改に毎年4か月近くの時間をかけていたのである。

一方、領民はどのように宗門改を受けていたのだろうか。丹生原村組（大分市）を例にみてみよう<sup>20)</sup>。まず、宗門改の台帳となる「家内帳」を作成している。「家内帳」は、「いえ」毎に全ての人名、続柄、年齢、檀那寺を記載し、村毎に集約している。類族の注記もなされている。正月16日に各村の村役人が各「いえ」に前年以降の出生・死亡・婚姻等の変動について修正することを指示し、約半月かけて村保存用の「家内帳」を作成している。

完成したものを村役人が三回の読み合わせ確認した後に「いえ」毎に捺印し、2月3日からこれを基にして藩へ提出する「家内帳」の作成に取りかかっている。15日までに、藩提出用の「家内帳」を完成させるとともに、絵踏会場である丹生原村組（大分市）を統括している大庄屋の屋敷に行くことができない者を集約した「他領行帳」と「病人帳」も作成している。「他領行帳」は、奉公等で他地域にいる者はその場所で絵踏をすることになるため、確認用に作成されている。「病人帳」は、病気等で自村から動けない者を集約し、各村を訪問して絵踏を実施するために作成されている。目の見えない者も各村で絵踏を実施していたので、「病人帳」に記載さ

18)「池見家文書」(大分県立先哲史料館寄託)。

19)「文化十四年 御会所日記」(臼杵市蔵)。

20)「文化十四年 踏絵御改御用留書」(「池見家文書」大分県立先哲史料館寄託)。

れている。これらの作成された文書は、大庄屋のもとに村組分が集められ、宗門改に際して宗門奉行に提出されている。

1 か月をかけて宗門改に必要な文書を作成しているが、作成途中に出生や死亡、病気等の追加事項が発生した場合には、その都度書き直すことはできないので、追加事項1 件ごとに書類を作成して宗門奉行に提出することになっていた。また、宗門改当日の急病人も書類を提出していた。2 月18日、丹生原村組に関する絵踏が大庄屋宅で実施され、病人等は各村で行われた。

このような準備の状況を見ると、村組をあげて、「類族」であるかどうかに関係なく、村組全員で宗門改が問題なく終了するように慎重に取り組んでいる様子がうかがえる。また、作成した文書を見ると、宗門改を毎年実施することにより、藩が全ての領民の動向を把握できるようになっていたことがわかる。

### （3）宗門改に対する意識の変化

臼杵藩では、延宝5 年（1677）に長崎奉行所から踏絵を借用するようにした時、借用には宗門奉行が出張することになっていた。それから130年以上が経過した文化7 年（1810）、長崎奉行所に踏絵を借用しに行くのは宗門下役の役割に変更されている<sup>21)</sup>。宗門奉行が出張すれば随行も多く費用が多額となったが、宗門下役の出張で随行の人数も少なくなれば費用を節約することができるといふ藩財政の改革の一環であった。財政窮乏に対する苦肉の策といえるが、踏絵借用を宗門下役に任せるといふ判断は、踏絵借用に対する藩の意識変化の表れといえるし、年中行事として形式化していたといえるであろう。

文化14年（1817）正月18日、臼杵藩の家老等の協議の場である御会所において、次のような申し渡しが行われている<sup>22)</sup>。

- 一 在中宗門御改之節、宗門奉行始御役人取賄之儀致手輕候様、毎々申聞候得共、兎角ニ別近年之儀は相弛之趣に相聞、去秋作毛不宜一統難渋之事ニ候得者、尚更是迄毎度申聞候通、規度相心得、手輕ニ取計候様可申付候、御郡奉行被申聞也

宗門改のための宗門奉行一行の廻村が、過度に領民の負担となっている状況があるので、負担軽減を図るようというのである。

宗門改に関する支出について、丹生原村組（大分市）の状況を見ると、次のように記されている<sup>23)</sup>。

覚	
一 錢五拾五匁	筆紙墨代
	印肉拵代共ニ
一 同八匁五分五厘	米代
一 同貳拾貳匁五分	酒代
一 同拾六匁三分	肴代

21)「文化十四年 御会所日記」（臼杵市蔵）。

22)「文化十四年 御会所日記」（臼杵市蔵）。

23)「文化十四年 踏絵御改御用留書」（「池見家文書」大分県立先哲史料館寄託）。

- 一 同拾七匁六分六厘 諸道具買物
- 一 同五匁 病人入用
- 一 同貳拾四匁三分貳厘 帳面取調る入用
- 一 同六拾五匁七分 諸品買物

メ貳百拾五匁三厘

人高千三百八拾人

但し、壹人ニ付壹分六厘

「家内帳」を作成するための筆・紙・墨代や印肉作成費用等の他に、米代・酒代・肴代等も計上されている。これらの費用は、村組で人数割りして徴収していた。臼杵藩御会所において申し渡された負担軽減とは、この米代・酒代・肴代等の賄い費用のことであろう。これらの費用の増加は、廻村する役人の意識の変化、気の弛みからきているともいえる。

前述した正確な「家内帳」等の記載に時間を掛けて作成している領民の姿からは、「家内帳」等の正確さを求めている藩の姿勢を垣間見ることができた。その一方で、藩における絵踏に対する重要性の意識が希薄化している状況もみえてきた。これらのことは、キリシタン禁制政策としての宗門改から民衆統制のための年中行事となり、「家内帳」等による民衆把握に重点が置かれるようになっている実態を示している。

臼杵藩における宗門改は、安政5年（1858）まで踏絵を伴うものであったが、その後は戸籍調査的なものとして明治4年（1871）1月まで実施されている。

## むすびにかえて

以上、臼杵藩を例に近世豊後におけるキリシタン禁制政策について検討してきた。ここで、本稿の概要とマレガ文書のもつ可能性についてまとめておきたい。

臼杵藩のキリシタン禁制政策は、慶長19年（1614）以降、キリシタン一人一人に対して檀那寺を決めたり絵踏を行ったりして改宗させていった。その結果、元和8年（1622）を中心に多くのキリシタンが改宗している。そして、表面上キリシタンがいない状況になった寛永12年（1635）、檀那寺による旦那であるという証明が書き込まれた「いえ」毎の起請文を作成させ、改宗した者を「いえ」単位で把握し、再びキリシタンとなることがないように監視する体制を作っている。

島原・天草一揆後、正保3年（1646）、臼杵藩では、慶長19年（1614）以前に改宗した者や改宗した者が改宗する前に生まれた子どもにも絵踏を行わせ、監視の対象者として政策の強化を図った。併せて、五人組制度を整え、正保3年（1646）、五人組に「きりしたん宗門重而御改ニ付五人組御書物之事」を作成させ、藩宗門方に提出させた。改宗した者を散らばらせ各村の地縁的な繋がりを断ちきって五人組を編成することにより、知っている者同士で隠したりかばったりすることが起きないようにし、監視体制の強化を図った。

延宝5年（1677）以降は藩の宗門奉行が絵踏の際に長崎奉行所から踏絵を借用するようになり、元禄元年（1688）からは僧侶も含め全領民を対象として毎年絵踏を実施するようになった。絵踏を伴う宗門改に際して宗門改帳も作成しており、貞享4年（1687）には「類族」も監視対象とされ、臼杵藩のキリシタン禁制政策は確立した。



臼杵藩におけるキリシタン禁制政策は明治4年（1871）まで継続されている。しかし、19世紀になると、藩は「家内帳」をはじめとする宗門改に関する文書は時間をかけて正確に作成させる一方で、長崎奉行所への踏絵借用は宗門奉行から宗門下役の役割に変更され、絵踏に際して酒・肴等が準備されるなど絵踏に対する重要性の意識が希薄化している状況がみえるようになった。宗門改が民衆統制のための年中行事となり、「家内帳」等による民衆把握に重点が置かれるようになっていったといえる。

臼杵藩におけるキリシタン禁制政策に関する史料は、一部の村等に残る控と藩御会所で議題とされた記録以外には、ほとんど残っていない。村等から提出され藩宗門方が保管していた文書が、マレガ文書に多数含まれていることから、今後、マレガ文書の調査・研究が進んでいくことで、キリシタン禁制政策の具体像や類族の生活等、様々なことが明らかになってくると考えられる。

マレガ神父は、『豊後切支丹史料（正・続）』を編集する際、様々な人々の協力を得ている。例えば、大分県で地域の歴史の研究をした伊藤東氏（1886～1959）とも交流があり、昭和17年（1942）の伊藤氏に宛てたマレガ神父の書簡<sup>24)</sup>をみると、伊藤氏が『豊後切支丹史料』刊行直前に臼杵藩の村役人の名前について情報提供したことがわかる。このように、大分県でその大半が作成されたマレガ文書の調査・研究においても、大分県に残る古文書や遺跡・遺物などとともに研究することで、大分県に限らず近世の日本におけるキリシタン禁制政策やそこでの人々の生活の状況がさらに具体化できるものと考えられる。

また、キリシタン禁制政策と当時の人々が営んでいた多種多様な宗教生活の有り様との関わりについての検討も重要であると考えている。

今後、マレガ文書に関して、様々な視点からの国際的な共同研究がなされ、多くの成果があることを期待したい。

#### [付記]

本稿は、人間文化研究機構日本関連在外資料調査研究「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査研究（マレガ・プロジェクト）」（研究代表者 大友一雄）及び2014～15年度東京大学史料編纂所・特定共同研究「『豊後切支丹史料』及びその原文書の史料学的研究」（研究代表者 松井洋子）の研究成果の一部である。

なお、マレガ文書の写真はマレガ・プロジェクトより提供を受けた。

---

24) 「秋葉文庫」（豊後大野市立図書館蔵）。

